

転生少女は異世界で 理想のお店を 始めたい

猫すぎる神獣と一緒に、
自由気ままにがんばります！

3

Umemarumikan
梅丸みかん
Illust. にやまそ

Tenseishojo ha isekai
de risonoomise wo hajimetai



CHARACTERS



第一話 海の幸を手に入れよう

料理好きの私、奄美根花櫻(よまみねかほる)は、ある日、白猫を避けようとして事故に遭い、命を落としてしまった。気がつくと、白い世界でその白猫と女神様に出会っていた。白猫の名はグレン。女神様の眷属(けんぞく)だという。自分の店を開く——そんな夢を叶える寸前で命を失った私を、女神様は自身が守護する異世界へ転生させてくれた。その世界で夢を実現させるようになると。だけど、そこでは料理に必要な材料が足りない。女神様が与えてくれた「創造魔法」と「店舗付きの家」のお陰で、なんとかお祭りに出店はできたものの、それでもまだ欠けている食材が多かつた。

そんな折、私は転生したこの体が、かつてドメル帝国に滅ぼされたクラレシア神聖王国の出身だと知り、理由もなく涙が止まらなくなつた。きっとこの体は辛い過去を背負つており、その痛みが私に伝わってきたのだと思う。

それでも、この世界で出会ったクランリー農場やヨダの町の人々は、温かく私を支えてくれた。特にクランリー農場の息子で冒険者のショウは、私の料理を気に入ってくれたのか、いつも手を貸してくれた。

お祭りが終わってしばらく経つた頃、ショウは冒険者として指名依頼を受け旅立つてしまつた。

私は新たな食材を求めて港町へ向かう計画を立てていたが、その矢先——ショウから魔通機に着信が入ったのだった。



「やあ、カリン。元気だつたか？」と言つてもあれからそんなに経つてないけど……」

「ショウ！元気そうね。私は元気よ。今どこにいるの？危険なことはないのかしら？」

「ああ、俺は強いからね。心配しなくとも大丈夫さ」

私は魔通機から聞こえてきた彼の変わらぬ声を耳にしてホッとした。

「ショウ、私ね、もうすぐお店をオープンできると思うの。今着々と準備中よ。だから、仕事が終わつたらまた私の料理を食べに来てほしいの。新メニューも色々考えたのよ」

「そうか、それは楽しみだな。絶対食べに行くよ。それにしてもカリンに会いたいなあ。離れてから少ししか経つていないので、カリンが恋しいよ」

ショウは恥ずかしげもなくそんな言葉を言つてのける。

まあ、私が恋しいのではなく私の作った料理が恋しいのだろうけど。

「ショウが帰つてくるまで腕を磨いて待つているわね。無理しないでがんばってね」

「カリンも無理するなよ。早く帰れるようにがんばるよ。カリンの料理楽しみにしているよ」

やつぱり恋しいのは私の料理のようだ。

魔通機をそつと切り、ショウとの会話でますますやる気に満ちた私は、再び開店へ向けて準備を進めることにした。

調味料は大体手に入つたから、料理の幅も広がりそうだ。

「あとは食材。やつぱり海の幸が欲しいわね」

『ほう、海の幸とな。それは美味そうだな』

どんなものか分かつてないだろうに、目を輝かせるグレン。

『グレン、海に行きたいんだけど、背中に乗せてもらつていいかしら？』

『むろん、構わぬぞ。いざ参ろうではないか』

行く気満々のグレンは、すぐに身体を大きくして準備を整えた。海のある町といえば、一番近いのはエンサの町だ。

私が背に乗ると、グレンは誰にも見られないように認識阻害の魔法をかけた。

いくつかの村を通り過ぎ、林の中を駆け抜けると港町を見渡せる丘の上に辿り着いた。

左右に広がる高い埠の先には、カラフルな建物が並ぶ町が見えた。さらにその向こうには、エメラルドとコバルトブルーの海原が水平線を描いている。ここがエンサの町だろう。

潮風が頬を撫で、私の髪を揺らす。この世界に来て初めて見る海に感動してしまう。



町の手前で認識阻害の魔法を解除して、ただの猫の姿に戻ったグレンと一緒に町の入り口に近づいた。承認証を見せ、エンサの町に足を踏み入れる。

白い煉瓦が敷き詰められた石畳を、色鮮やかな建物の間を縫つて、潮の香りや波の音を頼りに進む私とグレン。

心なしかグレンの足取りが軽い。

海の幸がよっぽど楽しみなようだ。

港に近づくと、魚の焼ける美味しそうな匂いが漂ってきた。グレンの鼻がヒクヒクし、瞳がキラキラと輝いた。美味しいものの匂いに期待を膨らませているのだろう。

海が見えてくると港を囲うように屋台が並んでいた。旅人や地元民らしき人たちが屋台で買い物をする姿が見えた。私もグレンと一緒に一つの屋台に近づいていく。

どうやら魚を串に刺して焼いているらしい。なんの魚か分からなかつたけど、試しに買ってみることにした。

屋台のおばさんから串に刺さつた二つの焼き魚を受け取り、ついでに市場の場所を尋ねる。

「市場？ 魚が欲しいなら、漁師から直接買った方が安いよ。今、丁度漁船が戻ってきた頃だろうからね」

なんと！ 漁師さんから直接買えるらしい。

いや、ここは敬意を払つて漁師様と呼ばせていただこう。

「ホントですか？ 教えてくれてありがとうございます！」

私は嬉しさのあまり、テンション高めで屋台のおばさんにお礼を言つた。

港に行くと大小様々な船が停泊していた。そのうちの一つ、中くらいの大きさの船の上で屈強そうな男性たちが作業しているのが見えた。きっと彼らが漁師様たちだ。

「あの、漁師様、お魚少し譲つてもうえないでしようか？」

「漁師様あ？」

私が声をかけると一人の男性が怪訝な顔でこちらを振り向いた。
赤茶の五分刈りに憲色の鋭い眼差しが私を見据える。

タンクトップにたくましい筋肉、海の男らしいよく日焼けした肌は太陽の光がよく似合っていた。

「ハハハツ、初めて漁師様なんて言われたよ」

私の父親ほどの年齢であろうその男性は豪快に笑つた。

「あつ、あのぉ」

「ああ、悪い悪い、『様』なんてつけなくていいよ。俺の名前はカイトだ。もちろん魚なんていくらでもくれてやるよ。今日は大漁で、売れ残るほど取れたからな」

「カイトさん、ありがとうございます。でも、ちゃんとお金は払いますよ。私、これでもお金持ちなんです」

領主様から報奨金をいただいたからね。

「いや、いいよ。どうせ余つたら処分するしかないんだ。どれ、今袋に詰めてやる」

「そうだぞ、嬢ちゃん。いいからもらつとけ」

カイトさんの後ろから他の漁師の声が聞こえた。

「今、袋を持つてくるからちよつと待つてくれ」

カイトさんは船の奥に引っ込むと、すぐに網目状の袋を持つてきた。

「この魚は塩を振るだけで美味いんだ。ああ、これはスープにすれば出汁が出る」
魚を一匹ずつ大きな網から小さな袋に入れ替えながら説明していくカイトさん。
私が口を出す間もない。

「ん？ これはブラックシュリだな。これはいらんな」

「あーっ！ ちょっと待つてください！ それは捨てちゃダメです！」

私はカイトさんが手を持つて捨てようとしたものを慌てて止めた。

だって、それって黒いけど、前世のものと色は違うけど、どう見てもエビだよね。
それに結構大きくて立派なエビ。捨てるなんて考えられない。

でも、この国の人たちはエビを食べないのかしら？ 毒があるとか？

そう思つてこつそりタブレットで鑑定してみたけど、毒はないみたい。
ならなぜ？

「娘ちゃん、これはブラックシュリといつて海虫の一種だぞ。こんなのが食べるのか？」

私はカイトさんの言葉になんとなく納得した。この世界では前^{まへ}と違つてエビは虫扱いらしく。そりやあ虫と認識しているなら食べないよね。確かにエビはよく見ると気持ち悪い。足がいっぱいあるし。でも味は美味しいのよ。

エビフライ、天ぷら、エビチリ、グラタン……

もう、これはゲットするしかないでしよう。

「あの、カイトさん。私にそれをいただけますか？ 食べると美味しいんですよ。よかつたら私、お礼にエビ……じゃなくてブラックシュリ料理を作りますよ。作る場所を提供していただければ」「本当にそれ食えるのか？ 美味いのか？」

最初は私の言葉を聞いて目を丸くしていたカイトさんだったけど、どうやら興味を持ったようだ。

「そうだな、本当に作つてくれるのか？」

「もちろんです」

私が頷くとカイトさんは、「友人がレストランをやつてるんだ。そいつに相談してみよう」と言つて、すぐに船に置いてあつた宅送鳥^{たくそうとうひょう}でその友人に連絡を取つてくれた。そして、私はそこでエビ料理……ブラックシュリ料理を作ることになったのだった。

カイトさんからはブラックシュリの他にもウニ、イカ、タコもいただいた。

どうやらこれらも食べる習慣がないようだつた。

怪訝な顔をするカイトさんとその仲間たちをよそに、私は思いがけず手に入れた海の幸に笑みがこぼれるのを抑えることができなかつた。

カイトさんの作業が終わると、友人が経営しているというレストランへ連れてついてもらつた。

今日は店の定休日らしく、快く厨房を使わせてもらえることになつた。

「港町レストラン」という看板を掲げた店に着くと、がつしりした体格の男性がニコニコ笑顔で迎えてくれる。

「カイトが厨房を貸してくれつて言うからその理由を聞いたら、とんでもない食材で料理を作つてくれるつて言うじゃないか。料理人としては歓迎するしかないな。俺の名前はピエトロ、よろしく頼むよ」

店が休みなのに申し訳なく思つていたから、ピエトロさんのワクワクした様子に胸を撫で下ろした。

「カリンです。今日は厨房を貸していただけるそうで、ありがとうございます」

私はピエトロさんにお礼の言葉を述べた。

ピエトロさんはカイトさんと同じくらいの歳で、なんといつても髪と同じ雑茶色の口髭^{くちひげ}が印象的だつた。

まるでつけ髭のようだなあと思つたのは内緒だ。

厨房に案内してもらい、早速調理を始める。

エビといえば、やはりエビフライ。前世でも人気の一品だつた。

私が必要な材料を告げると、ピエトロさんが「遠慮なく使つてくれ」と言つて調理台に次々と並べてくれた。

まずはタライに入つたブラックシュリを取り出し、殻をむいてバットの上に並べていく。

その後、塩と片栗粉をまぶして揉み込み、水洗いする。この下処理をしておかないと臭みが残つてしまふので重要な作業なのだ。

次に背ワタを取つたら、腹側に切り込みを入れ、真っすぐにして形を整える。

ああ、そうそう、尻尾の先に切り込みを入れて水分を取つておくのも忘れてはいけない。油が跳ねないようにね。次に、塩こしょうをして少し時間を置く。余計な水分が出てぱりぱりとした食感になるのだ。

私がやる作業を興味津々で食い入るように見ているカイトさんとピエトロさん。

「ほう、殻を取つてたくさんさんの脚がなくなると、なんだか美味そうに見えるな」

腕を組みながら感心したようにカイトさんが呟いた。

「そうでしょ？ でも美味しいじゃなくて、本当に美味しいんですよ。このまま少し時間を置くので、その間にタルタルソースを作りますね」

「タルタルソース？」

私の言葉に疑問の声を上げたのはピエトロさんだ。

「はい、エビフライ……ブラックシュリフライに付けて食べるとしても美味しいのです」

「ブラックシュリフライ？」

「はい、今から作る料理の名前です」

私は二人の質問に答えながら作業を進めた。

定番のタルタルソースはピケルスを使うが、今はないのでキュウリ……に似た野菜に塩をまぶして水分を取る。オリーフ（タマネギもどき）はみじん切りにして水に漬けておき、その間にゆで卵を作り細かくする。

以前作つておいたマヨネーズをマジックバッゲから取り出し、それに全てを入れて混ぜる。これでタルタルソースが完成だ。

「その白いソースはなんだ？」

ピエトロさんの質問に、そういえばこの世界にはマヨネーズがなかつたことを思い出した。

「これは、マヨネーズといって、食用油、酢、卵で作ったソースです。サラダにかけたり、料理に入れたり、色々使えるんですよ」

「ほう、そんなものがあるのか？ 少し味を見させてもらつていいかい？」

私がマヨネーズを差し出し、ピエトロさんが一口味見をすると驚いた表情で固まつた。

「これは！ 初めて食べたがなんて美味しいんだ！」

ピエトロさんの感嘆の言葉に、カイトさんも続けて味見をすると同じように固まり、「美味いな」と一言呟いた。

やはり、この世界の人もマヨネーズの美味しさが分かるみたいだ。

下処理が済んだブラックシュリに小麦粉、卵、そしてパン粉の順に衣をつけたら、油できつね色になるまでカラッと揚げていく。

さくさくのエビフライならぬブラックシュリフライが出来上がった。

タコはカルパッチョに、ウニはそのまま半分に割ってお醤油をかけて、イカは姿焼きにしてみた。お醤油はもちろん私の手作りで、こつそりマジックバッグから取り出して使ったのだ。

料理が出来上がるごとに、二人……と一匹は目を輝かせた。

「ほう、見た目も匂いも美味そうだな」

興味津々なピエトロさん。

「はい、本当に美味しいから是非食べてみてください」

「ああ、もちろんいたくよ。では、俺も自慢のスープを披露しよう。この店でも評判なんだ。すぐできるからちょっと待つてくれよ」

そう言つてピエトロさんは茶色い物体を棚から取り出した。

あれ？ ちょっと待つて、それって……

「ピエトロさん、それ鰯節かわおぶしですよね？」

すかさず質問する私。

「鰯節？ これは俺が開発した乾燥魚の、いわゆるスープの素もとだ。これを削つてスープを作ると美味しくなるんだ。口持ちするように魚を燻して乾燥させたものなんだ」

やつぱりそれは私が探し求めていた鰯節と同じものでは？ 口にしてみないと全く同じかどうかは分からぬけど、私の中で期待が高まつた。

それにしても鰯節もどきを開発するなんて、ピエトロさんってばすごい！ と私は尊敬の眼差しを向けたのだった。

鰯節……乾燥魚の出汁で作つたスープは、海藻を卵でじたもので、その優しい味に懐かしさを覚えた。風味は前世の鰯節と遜色ない。

この国では海藻も普通に食されているのだと知つたのだが、ピエトロさんの話ではこの町だけでしか食べられないという話だつた。

理由は日持ちがしないこと。

採取して三日以上経つと苦みが増して食べられなくなるそうだ。塩漬けにしたり乾燥させたり様々な保存加工を施しても、どうにもならなかつたらしい。

どうやら前世で私が知つている海藻とは性質がかなり違うみたいだ。他の町どころかこの町の市場にも置かれていないと聞き、私はがつかりした。

ピエトロさんの場合は、カイトさんが漁のついでに採取したものをその日のうちに直接買い取つ

ているそ�だ。

そのことを聞いて私がどうしても譲つてほしいと懇願したら、昨日採取したばかりの海藻をピエトロさんからもらえることになつた。

保存期間のことを心配していたピエトロさんだが、私には時間停止機能付きマジックバッグ（正確にはマジックバッグと繋がつてゐる食品庫だけど）があるから大丈夫だと説明した。

二人はとても驚いた表情をして、絶対にそれを他で言つてはいけないと念押しされてしまつた。そうだよね。以前にダンテさんたちにもそのことを言われていたはずなのに、すっかり忘れていたよ。

昔から食べ物のことに集中すると他のことが疎かになるのは私の悪い癖だ。

とはいえ、そのことを言わなければ海藻類をゲットするのは難しかつたのではないだろうか？

と心の片隅で自分を正当化してしまつた。

そんなこんなで出来上がつた料理を早速試食してもらうことにして。

最初はお互いに顔を見合わせながらどつちが最初に口をつけるか様子見していたが、なんの躊躇もなくがつがつ食べるグレンの姿を見て、二人は同時に食べ始めた。

戸惑つていたはずの二人は、タルタルソースを付けたさくさくのブラツクシュリフライを口にすると、その美味しさに驚きの声を上げた。

『おお！ この料理はカリンが作つた中でもトップクラスであるな』

グレンもかなり気に入つた様子で大絶賛していた。

タコやイカも最初は恐る恐る口に運んだが、すぐにその美味しさに取りつかれたように無言で黙々と食べていた。

特に面白かったのは、ウニをスプーンでくつけて食べてみせた時だ。

二人とも怪訝な顔をして、私が口に入れる瞬間、ゴクリと唾^{つば}を飲み込んで凝視していた。

すると、私の顔が緩むのを見て興味が湧いたピエトロさんが最初にチャレンジした。

二つに割つたウニを殻付きのまま醤油を垂らして差し出すと目を瞑り、思い切つて口に入れたその瞬間の表情が忘れられない。

ピエトロさんは目を見開き、驚きの表情で全身を震わせながら感動していた。

どうやらウニはピエトロさんの琴線に触れたらしかつた。

その後、彼は私の作った料理を自分のレストランで提供させてほしいと懇願してきた。もちろん、私は快く了承し、私が知つてゐる限りの海の幸レシピをピエトロさんに伝えることにした。

でも、驚かされたのは、私がこつそり使つた醤油のことを聞かれたことだつた。さすが料理人。口に入れただけでその存在に気づくとは。私は醤油は自分の手作りだけど、そのうち市場に出回るかもしれないことを告げた。この時、私はウォルフ様が計画している砂糖工房と一緒に調味料を作る場所も作つてもらおうと勝手に決めたのだつた。

ピエトロさんはアイデア料を受け取つてほしいと言われたが、私はそれよりも鰯節を安く譲つ

てもらうことにした。海藻もたくさんもらえることになった。

この町に来たのは大正解。私にとつて大きな収穫だった。

「カイトさん、たくさんの海の幸をいただきましてありがとうございます」

「カリン、こちらこそ美味しい料理を堪能させてもらつて感謝するよ。またいつでも来てくれ。ブラックシュリも魚もいくらでもあげるよ」

「ありがとうございます。でも、次はちゃんと購入させてください」

「まあ、カリンがそこまで言うなら仕方ないな。でも、安くさせてもらうよ」

私はカイトさんの気持ちをありがたく受け取り、お願ひしますと素直に言つた。

ピエトロさんは、私がヨダの町の近くでお店を開くつもりだと言つたらとても興味を示してくれた。「機会があつたら絶対行かせてもらうよ」と言つてくれたけど、普通なら馬車で数日かかる距離なので、そう簡単には来られないだろう。

私は、もつと簡単に行き来できるように、エミュウさんが開発した魔導カーが早くこの世界に普及することを願つた。

そういえば、ウォルフ様が依頼している魔導カー工場計画はここまで進んだのだろうか?

この機会に、バスやタクシーなど、誰でも気軽に利用できるような移動手段を提案しようかな。



食材を手に入れるために奔走してきましたお陰で、かなり入手経路が確立してきた。
まだ足りないものは……

コンコンコン……

自室のソファーでお茶を飲みながら考えを巡らせていると、窓の外で黄色い鳥が羽ばたいているのが見えた。近づくと額の部分に三角を二つ重ねたマークを確認することができた。

「あら、ダンテさんの宅送鳥……」

手紙を読むと、明日クランリー農場に来てほしいとのことだつたので、すぐに了承の返事を返した。

きっとバターとチーズ製造のことだらう。もしかしたら工房が出来上がつたとか。

「そうだ! エンサの町で手に入れた材料で何か作つていこう。みんな喜んでくれるかしら?」

私は喜々として、海の幸料理を作ろうと腰を上げた。

『そうか、ならば味見は某に任せらるがよい』

「ふふふ、じゃあ味見係はグレンに任せらるからよろしくね」

グレンはただ料理が食べたいだけだということを知りながら、私はお願いすることにした。

厨房に行き、調理台の上に材料を並べて何を作らうかと思案した。

どうせならこの世界に来てからまだ作つていない料理がいいわね。

「そ、うだ！ 確かあれがあつたわね。ラシフィーヌ様が作つてくれた魔導具……」

奥にある棚の一番下にある開き戸を開ける。

「やつぱりここにあつたわ」

その魔導具を取り出し調理台の上に置いた。

『それはなんだ？』

『グレンが不思議そうに首を傾げた。その姿がなんとも可愛らしい。
「じゃーん！ これはパスタマシーンなのです。これから海の幸たっぷりのペスカトーレを作ろう
と思うの」』

『ほう、なるほど。それは美味そうだ』

利いた風な口ぶりだけど、きっとどんな料理か分かつていないと思う。でもまあ、いいか。グレンの中では私が作る料理は美味しいという絶対的信頼があるのであるのだということで。
今まで作つた料理はことごとくグレンの舌を喜ばせてきたみたいだし。

それでは小麦粉と卵でパスタ生地を作つてみよう。

小麦粉に溶いた卵を混ぜる。水分が多くなりすぎないように小麦粉の量を加減したらひとまとめにして、一時間ほど寝かせる。

パスタマシーンにセットして赤のボタンを一回押してからハンドルを回すと、パスタ生地がマシーンの吐き出し口から薄くなつて出てきた。この薄くなつた生地を再びセットし白のボタンを二

回押してハンドルを回すと、今度はスパゲッティーニの形で出ってきた。

使い方はラシフィーヌ様作のお馴染み、半透明のタブレットを覗^{かざ}いたら表示された。赤のボタンを押す度に厚さが薄くなり、白のボタンを押す度にカット幅が広くなるのだ。それぞれのボタンを連続して押せば設定前の状態に戻る。

どれくらい厚くなつたか、どれくらいの幅になつたのかはボタンの上に数字が出るので一目瞭然だ。

これならば、スパゲッティーニだけではなくフィットチーネやラザニアも作れる。原料を変えればうどんやそば、中華麺もいける。

とりあえず、今回はペスカトーレを作るからスパゲッティーニだけ作ることにした。

山盛りのスペゲッティーニを用意した後、ブラックショウリとイカをたっぷり使つたトマトソース作りに取りかかった。ニンニク、オリーフ（タマネギ）を炒め、湯むきしたトマト（トマト）を細かくして加える。そこへ鶏ガラと野菜の皮を煮込んで作ったコンソメを加える。
オイルでブラックショウリとイカを炒めてから入れ、白酒^{はくしゅ}を加え塩こしょうで味を調えた。
早速、味見してみる。

「え？ 美味しい、前世のより美味しいかも……もしかして白酒のお陰かしら？」

私が美味しいと言つた言葉に反応したようで、グレンの瞳に期待の色が見えた。

『某も味見をしてやろう』

グレンにあげるともう味見の領域ではなくなるのだが、この瞳を見るとダメだとは言えない。

「そうね、グレンも味見してもらえるかしら？」

私はお皿にトマトソースの具も少し入れてグレンの前に置いた。

『おお！ これは今まで食べたカリンの料理の中でも群を抜いているぞ』

グレンはかなり気に入つたようだ。

「そう？ でもこれで完成じゃないのよ。これからさつき作ったパスタを茹でてこのトマトソースに絡めるの。完成したらもう一度グレンに味見してもらうから少し待つていてね」

『むろん、構わぬぞ。いつでも味見をしてやろう』

『ええ、よろしくね。ふふっ』

口の周りをトマトソースで赤く染めて偉そうに言葉を発するグレンに噴き出しそうになつた。グレンは白いから余計に目立つ。

パスタを茹でてから、トマトソースに絡めてグレンと一緒に味見をした。以前作つておいたカツテージチーズを振りかけて食べたら、コクが増してさらに美味しくなつた。

お弁当箱用に作つておいた容器に詰めていく。

さらに、白身魚フライ、エビフライ、イカリングフライのミックスフライセットも加えた。さて、これで準備万端。

そういうえば、ダンテさんに力クオをお願いしていたけど、手に入ったのかしら？

今度はチョコレートをもつとたくさん作つて、ケーキやアイスクリームにしたいな。

お店のショーケースに並べて売ることもできるし、デザートやお茶請けとしてメニューに載せることもできるものね。

食材がコンスタントに入手できる目処^{めど}が立てば、いよいよお店を開けるわね。

楽しみだわ～。

私の中でどんどん夢が広がっていくのだつた。



ダンテさんから手紙をもらった翌日、私は約束通りクランリー農場を訪れた。

「カリンちゃん、いらっしゃい。ダンテもウォルフ様もお待ちかねよ」

ん？ ウォルフ様も？ 私を出迎えてくれたセレンさんの開口一番の声に戸惑つてしまつた。

ダンテさんの手紙には相談したいことがあるとしか書かれていなかつた。

「セレンさん、ウォルフ様も来ているんですか？ 手紙にはそんなこと書いてなかつたんですけど」

「まあ、そうなの？ ダンテつていつも肝心なことを省略するのよね。でもまあ、カリンちゃんはウォルフ様に会つたことがあるから問題ないわね」

問題ないのか……？ 深く考えても仕方がないので、とりあえずセレンさんと共に応接室に向かつた。

「おお、カリン。よく来てくれた。待つていたよ」

「カリン、元気そうだな。この間の話が大分まとまってきたので、報告も兼ねてちょっと相談したいことがあつたんだ」

私が部屋に入ると、ダンテさんとウォルフ様が言つた。

テーブルを挟んだ正面にセレンさんとダンテさん、私の左側にウォルフ様がそれぞれ腰かける。まずは、ウォルフ様が計画の進捗状況を説明してくれた。

ヨダの町とクランリー農場の間には砂糖、チョコレート、チーズ、バターの工房、そして魔導カーワーク場を領都郊外に建設することに決定したそうだ。

乳製品の工場は、国内外へ流通させるため、クランリー農場の工房とは別に建設するらしい。

「そうだカリン、チョコレート製造の許可をもらいたいのだが。幸いにもカクオは私の出身地である隣のカザフ領が生産地だ。兄にも話は通してある」

「俺もそのチョコレートをダンテからもらつて食べてみたんだが、アレは画期的な食べ物だ。是非工房を作つてそこで生産させてほしい」

ダンテさんがチョコレートの話題を出すと、ウォルフ様は強い口調で話を継いだ。ウォルフ様はチョコレートをかなり気に入つたようだ。

私にとつては願つてもないことだつたのですぐに承諾し、アイデア料は現物支給を希望した。ついでに調味料の工房も作つてもらえないか提案してみた。

味噌、醤油、ケチャップ、ソース、マヨネーズの工房だ。みんなはそれがどんな調味料なのかすぐには分からぬようだつたので、順番にそれらの調味料を使つた料理を提供することにした。

手始めに昨日作った海の幸料理、ブラックショリフライで反応を試してみる。

タルタルソースを添えて出すと、最初は見慣れぬ料理に皆が戸惑いの表情を浮かべ、お互に顔を見合せた。

『ん？ 誰も手をつけぬのか？ ならばまずは某が味見をするのだ』

そう言うやいなや、グレンは豪快に食べ始めた。その姿を目にしたウォルフ様が最初にひとくち、次にダンテさんとセレンさんが同時に口に運んだ。すると、三人の表情が驚きと感嘆の色に染まつた。

ぶりぶりの身とさくさくの衣は、彼らにとつて初めての食感らしい。食材の正体を明かした瞬間、全員が一瞬固まつたのは、きっとブラックショリの異様な姿を知つていたからだろう。

「これは……マヨネーズだな。この前、私の邸でカリンが作つてくれた。なるほど、こういう食べ方もあるのか。ふむ、実に美味い」

ウォルフ様はすぐに、以前領主邸で披露したマヨネーズだと気づいたようだ。あの時も大層気に入つてくれていたので、今回も大好評だった。

とりわけタルタルソースは男性陣に人気で、そのベースとなるマヨネーズの工房建設は、満場一致で即決となつた。

もちろん、私はアイデア料としてマヨネーズを現物支給してもらふことになつた。でも、さすがに永遠というわけにはいかないから、三年間ということで納得してもらつた。

「ウォルフ様、工房群つていつから稼働できますか？」

私は気になつてることを尋ねた。ウォルフ様の答えによつてはお店の開店日に影響が出るからだ。

定期的に調味料や材料が入手できなければ営業に支障が出てしまう。作れないこともないが、全てを手作りするには時間が足りない。お店の運営は営業時間だけ働けばいいというわけではないからだ。

「……このままでいくと数ヶ月先になるだろうな。そのためにも今、人を集めているところだ」

ああ、そうよね。それだけの工房なんだもの。ヨダの町の住人だけじゃ足りないわよね。どこかから人材を確保するのは当然のことだわ。

でも、どこから？ まあ、そんなこと私が気にすることでもないんだけど……。ウォルフ様が少し言い淀んだのは気のせい？

「ウォルフ、カリんには話しておいた方がいいと思うぞ」

そこで言葉を発したのはダンテさんだつた。

ん？ 私にも関係あるのかしら？ 私は、首を傾げながらウォルフ様のその先の言葉を待つた。「実はだな……人材はバストイナ領にある難民キャンプから確保するつもりなんだ。もちろん、他の領地からも希望者は募つてているが……」

「難民キャンプ……？」

「クラレシア神聖王国の民の難民キャンプだ……それと……」

私の……というよりもこの身体の出身国でドメル帝国に侵略されて滅ぼされたというクラレシア神聖王国の難民キャンプ……

クラレシアの難民ってどれくらいいるのだろう？ もしかして、その中に私のことを知つていて人がいるかしら？ 私の中身が別人だつて分かつちやうかも……でも、記憶喪失ということにすれば大丈夫かな？

私の中で様々思いが渦巻いた。

「カリん……すまない……カリんにとつて受け入れがたいことだらうが……」

私が考え込んでいると、ウォルフ様が言いづらそうに言葉を続けた。

「ドメル帝国の難民にも働いてもらおうと思う。もちろん、クラレシアの難民とは住居や働く場所を分けるなり配慮をするつもりだ」

え？ ドメル帝国？ クラレシアを侵略した国でしょ？

「それって、大丈夫なんですか？ 爭いの種にならないんですか？ いくら平民で直接手を下し

ていなくても、ドメル帝国の人間だというだけで恨みを持っているクラレシア人も多いと思うんですね

すが」

「ああ、そうだな。だが、クラレシア人はドメル帝国の民をそれほど恨んではないようなんだ。
そればかりか、気の毒に思つて心配する声も聞こえるらしい」

私はウォルフ様の言葉を聞いて驚きを隠せなかつた。どうしたことなのだろうか？ クラレシア人にとつて憎むべき敵国の民を気の毒に思うなんて。だつて、ドメル帝国のせいで自分の身内を失つた人だつて大勢いるだろうに。

不思議そうに考え込んだ私に、ウォルフ様はドメル帝国の現状を教えてくれた。

ドメル帝国の土地は荒れ果てて、食糧も平民たちにきちんと行き渡つていないこと。

平民たちは重い税が課せられ、生活が困難で食べる物もないため、国を捨てる人が多いこと。
助けを求めて逃げてきた難民たちは皆やせ細り、栄養失調の状態にあつたこと。

ドメル帝国は逃げようとした国民に容赦ない懲罰を与えること。

無事にこの国に逃げることができたドメル帝国の民たちは、まさに命がけだつたのだ。

それにしてもクラレシア人、人がよすぎることはないか？ まあ、やせ細つて命からがら逃げてきた人を見れば助けたいと思うのは当然のことかもしれないが。特に子供がガリガリにやせて今にも死になつているのを見れば、敵味方関係なくなんとかしてあげたいと思うのは普通の感覚だらう。

「念のため、ドメル帝国の難民には魔法で隸属契約をしてもらうことになるだらう」

ウォルフ様は考へ込む私に重い言葉を告げた。

「え？ 隸属契約？ そこまでする必要あるんですか？」

私の認識が間違つてなければ、隸属つて奴隸のように言いなりに従わせるつてことよね。

「今は従順そうに見えても心の内は分からぬ。それだけドメル人は信頼できないということだ。
彼らの様子を見てもう少し軽い契約になる可能性もあるが……不快な思いをさせたら申し訳ない」

「ウォ、ウォルフ様！ 頭を上げてください、私は大丈夫です。了承も何も、私に異論はありませんから」

私は頭を下げるウォルフ様にあたふたしてしまつた。



翌朝、私はベッドに寝転がつたまま昨日のことを思い出していた。クランリー農場に持つていつた手土産の海の幸料理は大好評だった。ブラックシュリフライ、ペスカトーレ、それに、タコのカルパッチョ、全て受け入れられた。

これならばお店を開いた時、メニューに加えて大丈夫かもしない。

それよりもあの話し合いの中で気にかかつたのは、難民たちがこの地に移住してくることだ。そ

の時は平静を保っていたが、なんとなく胸がザワザワした。この身体に眠る記憶を刺激するかのように……

クラレシア神聖王国……私、いや、この身体の持ち主の出身国……

ウォルフ様が言つていたことが頭から離れない。クラレシア人とドメル人を労働者として受け入れると言つていた。

クラレシア国民の特徴は私と同じ藍色の髪だという。

まるで前世の日本人のように単一民族国家なのね。まあ、日本人は黒髪に黒い瞳だつたけど。

あれ？ 瞳の色はみんな私と同じ瑠璃色のかしら？ 鏡に映るその色は、深い海を思わせて神秘的で美しい。自分の瞳の色を美しいなんて言うとナルシストっぽいけど、前世の自分の姿を知っているせいか客観的に見てしまう。

ドメル人たちは生活難でやせ細つて自國から逃げてきたって言つてたけど、やはり戦勝国でも民たちへの影響は計り知れないってこと？

「ねえ、グレン。どうしてドメル帝国の民はそんなに生活に困つているのかしら？」

ベッドの上で本物の猫のように毛繕けづめいしている神獣に尋ねた。

『それは当然のことである。ドメル帝国は聖域であるクラレシア神聖王国を侵略したのだからな。精靈王の怒りに触れたのだ』

「え？ クラレシア神聖王国つて聖域なの？ そもそも聖域つて何？」

『聖域とは精靈界と人間界を繋ぐ精靈樹を守るために存在する土地である』

「精靈樹……？」

どうしよう、グレンの言つていることがよく分からない。グレンはいつも私の質問には答えてくれるけど、それ以上の説明はしてくれない。まるで余計なことを教えたくないようだ。

『精靈樹とは精靈とこの世界を繋ぐもの。精靈樹が消滅すればこの世界から精靈はいなくなり、自然の恵みを得られなくなるのだ』

自然の恵みつて水や植物とかだよね。それがなければ動物はおろか、人間だつて生きていけないわ。つまりこの世界そのものが消滅すること……それってやばくない？ ドメル帝国つてば、なんてことしてくれるのよ！ あつ、でもこの家の裏にある泉には精靈がいたから、精靈樹はまだ消滅していないってことよね。

もつと追及したいけど……これ以上踏み込んではいけないような気がする。私は身体の奥から湧いてくる拒否反応に、さらなる疑問を投げかけることができなかつた。

「ああ、もう！」

私は得体の知れない不安を搔扒かっしやくするように声を上げた。グレンはそんな私をジッと見ている。だけど何かを言うわけではない。

ただ私を見守るようにその眼差しは優しい。そんなグレンを見て守られていることを実感して、

心から安堵した。

考えても仕方がない。気持ちを切り替えて前に進もう。今の私にはそれしかできないのだから。私はベッドから起き上がり、これまで手に入れた食材をもとに他にも色々と料理を作ろうと厨房に向かつた。前世から悩みやストレスが溜まると一心不乱に料理に没頭していたのだ。

調理台に食材を並べたところでポケットに入っていた魔通機が鳴った。手に取つてみると、青いボタンが点滅していた。ショウからだ。

「カリン、元気か？ 今いいかな？」

「ショウ、私は元気よ。ショウも元気そうね。仕事は順調なの？」

私は彼の元気そうな声を聞いて安堵した。

「ああ、でもこれからちよつと忙しくなるからしばらく連絡できないと思う。必ず帰るから待つてほしい」

「もちろんよ。体に気をつけてがんばってね」

そんな夫婦のような会話をした後、私は魔通機を切つたのだった。

第二話 ショウ・クランリーの懸念

カリンの励ましの言葉で勇氣をもつた俺は、アーラーからの呼び出しを受け、とあるホテルの一室へ向かつた。そこでアーラーと彼の三人の部下たちと共に、今後の作戦について打ち合わせすることになったのだ。

ドメル帝国の諜報員・シャロンとの接触により、ティディアール王国へと逃れた帝国難民の中に、彼女の仲間が紛れ込んでいることが判明した。侵略戦争の終結後、帝国は度重なる自然災害や干ばつに見舞われ、民の生活は極度に困窮し、多くの人々が周辺諸国へと逃げ延びた。だが、侵略国民を受け入れる国は殆どなかつた。

そんな中、唯一寛容な姿勢を示したのが、我がティディアール王国である。賢王バリディツシユの慈悲により、難民を受け入れるためのキャンプが、既に我が国のバステイナ領に設けられていたのだ。

「それでさあ、どうやらタンクスティン領のヨダの町周辺ではいくつかの食品工房建設を計画してい

て、人材確保のために難民キャンプにも声をかけているみたいなんだ」

「難民キャンプに？ まさか、クラレシア人だけでなく、ドメル人の難民キャンプにもか？」

「ああ、そのままかだよ」

「なんだ？ ウォルフ様は何を考えているんだ？」

俺はアークの思わぬ言葉に立ち上がり詰め寄った。

「ショウ、まあ落ち着きなよ。なんの措置も講じずドメル人を使うはずがないから。魔法で隸属契約を施してからになると思うよ。それに住居も別になるだろう」

「それでも、ドメル帝国の諜報員が紛れているのだとしたら問題だ！ ヨダの町にはカリントがいるんだぞ！ もしかリンが見つかったら……」

俺はその先の予測を考えたくもなくて黙り込んだ。

カリントは記憶を失っている。そのことはアークも知っているはずだ。たとえドメル人に隸属契約を施していたとしても、契約を無効化する魔導具を持つていたら？ もしそんな魔導具が存在していたとしたら、彼らが何をするか分からぬ。俺の中で最悪の未来が頭を過ぎつた。

「うーん、でもそれは大丈夫なんじゃないか？ お姫様には強い守りがいるようだからね」

アークの言葉に身体がビクリと反応した。強い守り……まさか！ アークは神獣グレンのことを知っているのか？ 父さんの話では、ウォルフ様は陛下にそのことを報告していないようだったのに。

「クスッ、僕があの尊い神の使徒のことを知っているのが不思議だという顔だね。君は忘れてない？ 僕に君と同じ力があるってことを」

ウォルフ様が陛下にお会いした時に心の声を聞いたのか？ でも、心の声を聞くには相手を視認できる位置にいる必要がある。

「なぜだ？ 俺の父親の話では、ウォルフ様は陛下と二人きりで話したそうだが？」

「直接会つたわけじゃないさ。僕は一定の範囲内なら、場所さえ分かれば心の声を聞くことができるからね。君と違つて僕は幼少期からずっと訓練していくんだよ」

そうか、俺はなるべく自分の力を使わないようにしていたけど、アークは積極的に自分の力を使うようにして強化してきたというわけか。

「まあ、だからといってなんの対策も講じないわけじゃないさ。難民たちをタンゲステン領まで連れていくための護衛を募集しているみたいなんだ。資格はシルバーランク以上の冒険者ということだから、君も参加できるよね」

なるほど、アークは最初からそのつもりだったのか。となると俺は、クラレシア人ではなくドメル人難民の担当をしろということか。道中で不審な動きをする者がいれば排除するなり、捕縛することになるだろう。まあ、排除ではなく捕縛が優先だろうが。

ドメル人の諜報員はきっと例外なく微小カプセルを体内に埋め込まれている。カプセルが破裂する前に情報を入手する必要があるな。

「はあ、分かった。じゃあ俺はこれからバステイナ領に向かうとしよう」

「うん、頼むね。僕たちは一旦王宮に帰つて今後の作戦を練ることにする。まあ、王太子の兄上が

いるから大丈夫だと思うけどね」

巷ちまたでは、第一王子で王太子のアヴィオール殿下はご多分に漏れず聰明だと聞く。王太子に限らずティディアール王国の王族は優秀で、代々民からの信頼も厚い。ここまで王国が発展してきたのは彼らの手腕によるものだということは公然の事実である。

俺は自分の部屋に戻ると、これから任務を思い深い溜息をついた。他人の心の声を意識的に聞くのはかなり精神を消耗する。自分への批判や自己への批判、罵詈雑言を心の中で直接受け入れるようなものだ。仕事とはいえ、自分の力を疎む気持ちは嫌でも強まってしまう。

それに反して、アーレはどこか自分の力を楽しんでいるように感じた。俺と同じ力を持つのに、なぜあれほど飘々としているのか。俺はアーレの本心がどこにあるのか全く掴めなかつた。

まあ、王族ともなれば他人に表情や本心を読まれるのはあるまじきことなのだろうが。それでも、俺と同じ力を持つアーレと交流を重ねるうちに、これまで疎ましく思っていた自分の能力も、使い方次第では役に立つのだと実感するようになつてきた。そのことについては、アーレに感謝するしかない。ドメル帝国の問題さえ片づけば、またカリンと平穏な日々を過ごせる——そう信じている。そして、その時はもう間もなくだ。俺はその希望を胸に抱き、サラド公国を後にして祖国ティディアール王国へと向かつたのだつた。

第三話 試食会

いつの間にこんな所に来たのだろう?

私はボンヤリと辺りを見渡した。

霧がかかつたように真っ白で何も見えない。

あれ? 遠くの方に光が……

私は光を目指して歩を進める。

扉……?

光の中に現れた扉からは、眩まばゆいほどの光が漏れていた。

徐々にその扉は私の方に近づき、気がつくと目の前にまで来ていた。

私が扉の取っ手に手をかけようとした時だつた。

——ダメよ! その扉を開けないで!

心の奥底からそんな声が聞こえたような気がした。

テシテシ……テシテシ……

柔らかな何かが私の頬を軽く叩き、その刺激で瞼がゆっくりと持ち上がった。

肉球……

覚醒したばかりの私は、状況が掴めず目の前の肉球を凝視する。

『おお、カリン、目が覚めたか？ 其方うなされておつたぞ』

グレンの言葉が頭の中に届き、やつと私は自室のベッドで寝ていることを把握した。

「あら、グレン。起こしてくれたのね。ありがとう。なんか変な夢を見ていたみたい」

私は目の前にちょこんと座るもふもふの白猫の姿をした神獣に言った。心なしか心配そうに見える。

『大丈夫か？ カリン。何か思い出したのか？』

『え……思い出すつて？』

グレンの質問に質問で返す私。

思い出すとは何を？ ああ、もしかしてこの身体が持っている記憶のことだろうか？

『ああ、いや、変な夢を見たというから……』

『クスッ……大丈夫よグレン。扉を開かなかつたから』

『扉？』

訝しげに首を傾げるグレンに、私は「なんでもないわ」と言つて誤魔化した。

夢の中にあつた扉を開いたら、もしかしたらこの身体の記憶を引き出せたのかもしれない。そう

思うと同時に、私の中にはなんとも言えぬ恐怖に似た感覚が伝わってくる感じがした。

夢の中で微かに聞こえた言葉は誰のものだつたのか……そんなことが頭を過ぎつたが、今はこれからのことを考えようと気持ちを切り替えた。

不安を払拭するためには楽しいことを考えるのが一番だ。私にとつての楽しみといえば、もちろんお店をオープンすることだ。ということで、そこで提供するメニューを考えることにしよう。目指しているお店は、前世でいうカフェや喫茶店のような感じ。そこでは持ち帰りもできるスイーツも販売する。

では喫茶店にある定番メニューを思い出してみよう。

パンケーキ、パスタ、ハンバーグ、オムライス、そろそろ軽食といえばサンドイッチが最もポピュラーよね。そういうえば、サンドイッチはこの世界に来てまだ作つてなかつたわ。

あれえ？ なんで作つてないのよ。ああ、そつか。サンドイッチ用のパン……食パンがなかつたからだわ。

まずは食パンを作らなきやね。サンドイッチは中に挟む具材で色々楽しめるから、絶対作らなく

ちゃ。

では、まずは食パンを焼くことにしよう。そのためには……ドライイーストが必要だけど、もちろんそんなものはない。

でも大丈夫なのだ。なんと私は天然酵母のパンを前世で作つたことがあるのだ。早速、それを思

い出しながら天然酵母製造に取りかかる。

天然酵母は果物でも、小麦粉でも作れる。本来なら時間がかかるけど私には強い味方、女神様が用意してくれた魔導レンジがあるのだ。

今回は小麦粉と水と塩で作ることにする。材料を同じ分量ずつ混せて、魔導レンジを使い常温で一日だけ時間を進ませる。これを十回ほど繰り返す。

ここで気がついた。魔導レンジがあるといえど、結構手間がかかるということに。私はいつでも後で気がつくタイプらしい。思慮が足りないと言えばそれまでなのだが。

嘆いていても仕方がない。作り始めてしまったのなら最後まで作るしかない。どちらにしろ食パンを作るためには天然酵母が必要なのだから。

出来上がったフワフワ食パンを頭に描きつつ作業を始めた。

ようやく酵母種が出来上がり、卵、バター、小麦粉、バターを作った時に残った低脂肪乳を混ぜて一次発酵。もちろん、この工程でも魔導レンジが大活躍だ。

二倍くらいに膨らんで十分発酵したら、二つに分ける。分けた生地を一つずつ手のひらで軽く叩きながら余分な空気を抜いて、平らにしてクルクル巻く。これらを濡れ布巾で包んで二十分ほど寝かせる。

長方形の食パン型に寝かせた生地を並べて魔導レンジで一次発酵させてから焼き上げた。

厨房の中にパンが焼けた香ばしい匂いが充満する。

うーん、サンドイッチにするためには一晩置いた方がいいんだけど、焼きたても食べてみたい。端っこを切り取り、火傷しそうになりながら熱々のパンを小さく千切って一口食べてみる。

「おいしい……」

いつものことながらグレンの視線を感じるので、千切ったパンをお皿に乗せてテーブルの上に置いていた。

「お味はどう?」

ハフハフ言いながら美味しそうに食べるグレンに感想を聞いてみた。

『ふむ、なかなか美味であるな』

『そうであろう、そうであろう』

美食評論家みたいに偉そうに答えるグレンに、私は満足げに頷いた。

サンドイッチ用の他にトースト用も作つておくことにした。

出来上がつたのは合計十本の食パン。半分はサンドイッチ用にして、半分はトースト用にしようと思う。

そうそう、お店のメニューにはモーニングセットとかも入れようかな。ヨダの町のレストランで食べた時はモーニングセットなんてなかつたからね。まあ、モーニングセットどころかセットメニューがなかつたわね。全部単品メニューだつたように記憶している。

エンサの町の港のレストランも同じだった。私の店ではセットメニューをメインにしようか

しら?

とりあえず思いついたものは次々と作つていって写真に収める。それを元に宣伝用のチラシを作るとしよう。

まずはセットメニュー中心として……

朝食用のモーニングセットはトーストとスクランブルエッグにソーセージ……それにサラダ。飲み物はミルクたっぷりのチャーゴ茶か、カフェオレの選択制にしよう。で、朝食は定番にしてと……次は昼食メニューだけど……

この国では昼食を食べる習慣がない代わりに、お昼頃にお茶の時間がある。その時間にはスイツを中心にサンドイッチなどの軽食を提供しようかな。もちろん飲み物とセットで。うーん……そうだなあ、日替わりセットにしようか。

夕食もセットメニューで日替わりにして、メニューは二種類からの選択制にしよう。私一人で切り盛りするには、一度にそんなにたくさんのメニューはこなせないだろうからね。それでも大変そうなので週三日営業にして、休みの日は作り置きをした方がいいだろう。

幸いにして時間停止機能付き食品庫があるから腐ることもないだろうしね。

そうして、作る度に撮った写真を元に創造魔法でチラシを作つた。

店名は「カリンの喫茶店」という安いなネーミングだけど、分かりやすい方がいいよね。あれ? 分かりやすいと思ったけど、この世界で「喫茶店」なんて意味が通じるのかしら?

まあ、いいか。どんなものでも世に出たばかりのものは人々に馴染むまでに時間がかかるものだ。私の店が評判になれば問題ないだろう。

でも、その前にクランリー農場のみんなに食べてもらおう。というわけで、今日は出来立てのサンドイッチを持っていくことにした。この世界に来て初めて作つたふわふわの食パンは喜んでもらえるだろうか。グレンの舌を信頼していないわけじゃないけど、もつと他の人の意見も聞きながらお店で提供するメニューを決めた方がいいよね。私はさっそく、ダンテさんへお店で出すメニューの試食をお願いするために宅送鳥を飛ばしたのだった。



クランリー農場にはダンテさんとセレンさんの声がけで、エミユウさんとフランさんも来ていた。その結果、ダンテさん、セレンさん、ラルク、マギーばあちゃん、ロイじいちゃんを加えて七人に試食してもらうことになった。

お店で販売する予定の持ち帰り用のスイーツもいくつか持参したのでこれらも試食してもらい、意見を聞くことにする。

これだけの人たちにいい評価をもらえれば、安心してお店のメニューに加えることができるだろう。

「ほう、いつもカリンが持つててくれる料理は美味しいもんだなあ」

「本当に美味しいねえ。これは卵に……この味は……そうねえ……なんらかのソースで和えているのかしら?」

ロイジいちゃんとマギーばあちゃんはゆつくりと味わいながら卵サンドを囁みしめていた。

「パンに挟んでいる具材は全部マヨネーズで和えているんですよ。ほら、この前、ブラックシユリフライに添えたタルタルソースに使つていたでしょう?」

私がそう説明すると「なるほどな。こういう食べ方もあるんだな」とダンテさんが感心したように呟いた。

「すっごい美味しい! カリン、これすごく美味しいよ!」

ラルクがポテトサラダサンドと野菜サンドを片手ずつ持つて、息をつく間もなくかぶりつく。

「美味しいわ~カリンちゃんすごいわね~こんな美味しいものを作れるなんて。パンもふわふわで、その間に入つている具材も絶品だわ。この野菜に絡んでる白いソース、これが『マヨネーズ』っていうのねえ」

ハムと野菜のサンドイッチをひとくち口にしたフランさんが、うつとりした顔で絶賛した。

「そうだな、カリンが作る料理はなんでも美味しいな。カリンは料理の天才だな」

ダンテさんがドヤ顔で私の料理を褒める。うーん、料理の天才って、さすが親子だけある。ショウ

ウと同じ言葉を発するダンテさんに私は苦笑した。

「本当にカリンちゃんのお店のオープンが楽しみだわ」

「そうね、私もカリンちゃんのお店がオープンしたら絶対に食べに行くわね」

セレンさんとエミュウさんからはワクワク感が漂つてくる。二人とも楽しみにしてくれているようで嬉しい。

「ただ、カリンちゃんのお店つてガイストの森の中にあるわよね。町の人はなかなかそこまで行くのは大変かもしれないわね。まあ、私は魔導カーがあるからすぐに行けるけど」

私はエミュウさんの言葉にハッとした。

「そうだわ。前世ではたとえ町の郊外にお店があつても、バスや自動車があつたからよかつた。でも、この世界ではそれは難しい。馬車を持っている家は大きな商会とかに限られるし、馬に乗つてくるにしても所有している人は少ない。乗り合い馬車だつて一日二便しかない。ヨダの町からガイストの森まで、徒歩で一時間近くかかる。

となると、わざわざ私のお店に食べに来てくれる人はいない?

あら? ちょっとこれはまずくない? お店をオープンしてもお客様が来ないんじゃない?

「あつ、でも、冒險者はガイストの森によく行くから大丈夫だと思うわよ……」

私が考え込んでいると、エミュウさんがなんとかフォローしてくれた。

それでも、集客するためには何か対策する必要があるだろう。まずは交通経路の確保……これは

ウォルフ様に魔導バスの運行を提案しよう。それと、私の店のことをたくさんの人にくつてもらうためには……

そうだ！開店前に、親しい人たちを店に招いて私の料理をお披露目しよう。宣伝にもなるしね。そういえば、私のお店を宣伝してくれると約束をしたあの女性冒険者。パーティー、確かベッキーさん、メラニーさん、ティアさん……だったわね。彼女たちにあれから会っていないけど、元気かしら？宅送鳥で連絡してみようか……？うーん、別に急ぎじゃないし、仕事が忙しいかもしない……ならば、冒険者ギルドに行って伝言を頼んだ方がいいかも。

そう決めた私は、翌日、さっそく行動に移したのだった。

第四話 バステイナの女性冒険者

ティーディアール王国最北端、バステイナ領都ソネラにそびえる塔のよだな領主邸。その一室で、領主マークス・バステイナ伯爵の長女メラニー・バステイナは出発の支度を整えていた。

赤い髪と深緑の瞳を持つ彼女は二十歳を過ぎているが、十代後半と見紛うほど若々しい。

幼い頃から冒険者に憧れていたメラニーは、十五歳の時に父に懇願し「三年間だけ」という約束で冒険者になることを許された。だが、延長して二十歳を過ぎるまで続けることとなり、一月前に

ようやく帰還したばかりだった。

「乾坤の戦乙女」。それがメラニーの所屬するパーティ名である。

魔法に優れたメラニーを中心に、男爵令嬢でありながらメラニーの侍女兼護衛として仕えるベックキー、そして腕利き猟師の娘ティアがメンバーだ。三人は腕のよさもさることながら、相性のよさも相まって、ついには「ゴールドランクへと上り詰めたのだった。

父マークスは難民キャンプの管理に追われ、邸を空けることが多かった。メラニーはその隙に出かける決意を固めた。

「まあ、レグルスがいるから大丈夫でしょう」

そう呟きながら、メラニーは五つ年下の弟を思い浮かべた。

メラニーがベックキーを伴つて邸の外に出ると、仲間のティアが待っていた。

「ティア、お待たせ。ご家族は大丈夫なの？」

「はい、大丈夫です」

ティアは領内でも評判の猟師の娘であり、その血を受け継いだ彼女の弓の腕も卓越している。

三人は、ソネラの町の冒険者ギルドを訪れた。

メラニーはフードで顔を隠し、目立たぬようベックキーとティアの後ろを歩く。彼女が領主の娘だと悟られぬためだが、そもそも貴族の娘が冒険者をしているなど誰も思いもしないのか、これまで正体を疑われたことはなかった。

「ギルドカードを確認いたしますので少々お待ちください」

受付嬢にカードを渡すと、依頼の話が告げられる。

「現在、シルバーランク以上の冒険者にお願いしたい依頼がござります。タンクステン領へ向かう難民たちの護衛です。ただし人手が足りておらず……是非ゴールドランクの皆さんにお受けいただきたいたのですが。それと、メッセージが届いております」

「〔〔メッセージ?〕〕」

三人は同時に声を上げた。ベッキーが紙を受け取り、メラニーとティアが覗き込む。

——近々お店をオープンします。連絡ください。カリン。

深き夜を思わせる藍の髪と澄んだ瑠璃の瞳を宿した少女の姿が、ふいに三人の脳裏に甦よみがえった。

「カリンちゃんからだわ。どうとうお店を開くのね」

「慌てていたから連絡を忘れてた……そうね、護衛依頼を受けましょう。カリンちゃんにも恩を返したいし」

「ええ、でも依頼を受ければお父様に会うことになるわ。説得しなくちゃ」

メラニーはどこか憂鬱うきやうそうに小さく呟いたのだった。

護衛依頼を受けた三人は、クラレシア人たちの様子をうかがうために難民キャンプを訪れた。「あら、本当に藍色の髪の人ばかり……やっぱりクラレシア人の特徴なのね」

「カリンちゃんを思い出すわ」

ベッキーとティアは、懐かしそうに目を細めながら口にした。

「でも、どうしてカリンちゃんはこのキャンプじゃなく、あの森にいたのかしい? ここからだとかなり離れているのに」

メラニーはカリンと出会った日のことを思い返し、今さらながら胸に浮かぶ疑問を抑えきれないかつた。

「そうよね……あんな可憐かれんな少女が、一人で旅できる距離じゃないもの」

「それに、あの森の家だって……何度も森に足を運んでいたのに、あんな場所に家があるなんて誰も気づかなかつたわ。あの時は深く考えなかつたけれど、今になって思えば不思議だらけね」

ベッキーとティアも首を傾げた。思い返せば返すほど、謎は深まるばかりだった。カリンはなぜあの森にいたのか。あの家は、いったい誰が用意したものなのかな?……

しかし、メラニーはふと、あることに気づいた。クラレシア人たちから感じる魔力と、カリンから感じた魔力。その質がどこか異なつているように思えたのだ。明確には言えない。ただ、豊富な魔力を持つ者としての直感だつた。

クラレシア人の難民キャンプにマーカスの姿はなかつた。ドメル人の難民キャンプにいるのだろうと考えたメラニーは、帰宅を待つて直接説得することにした。